

阪東妻三郎から上海へ、共同研究「近代東アジアの風俗史」に参加して

木村立哉

わたしは学者ではなかった。東京の映画会社に在籍し、三〇年間、ただ映画のヒットについてだけを考え続け、学び、実践してきた人間に過ぎなかった。ただその学ぶ過程で、避けて通れなかったのが、映画の歴史であり、そもそも映画はどのように生まれ、どのように育ち、どのように人々に受け入れられて来たのか、知りたかったし、欲望にまかせて調べ尽くすことで大いに知ることとなったわけだが、さて気がつく、ただ知りたかっただけのことを知り、考えただけでは、試論として請われるままに雑誌等に発表するだけでなく、ウィキペディア日本語版に大量にページを作成していたりもしていたのである。

そして、わたしは、京都にいた。

東映京都撮影所に所属し、東映太秦映画村映画資料室で、四〇年にわたり大量に蒐集され、すでに完璧に整理されていた古今のノンフィルム資料を前に呆然としていた。時間を経

て朽ちようとする資料という名の物質、それにまわりつくホコリやカビと格闘していた。

そんなわたしが突然、国際日本文化センターの井上章一教授からお誘いをいただき、「近代東アジアの風俗史」の共同研究員を拝命したのは二〇一八年四月のことであった。



阪東妻三郎プロダクション (1926年)

＊

わたしが当時勤務していたその場所は、かつて九四年前の一九二六年、まだ満二四歳の新進スター俳優でしかなかった阪東妻三郎（一九〇一年～一九五三年）が竹やぶを切り開いて、自らのプロダクションのための撮影所を建設した、まさにその土地であった。それが現在の東映京都撮影所である。東映はもちろん戦後に設立された会社だ。

今でこそ「映画の撮影所」といえば東京か京都「京都の撮影所」といえば太秦」とだれもが思っているが、太秦の地に撮影所を建てたのは、阪東妻三郎プロダクションがいちばん最初なのだ。大映通りで知られる大映も、下鴨から移転してきた松竹も、阪東のずっと後になって太秦に集まってきたにすぎない。阪東とはもちろん、剣聖と呼ばれ、『雄呂血』（一九二五年）、『血煙高田の馬場』（一九三七年）、『無法松の一生』（一九四三年）での名演で知られる俳優であり、田村正和（一九四三年～）ら田村三兄弟の父である。

一九〇八年、牧野省三（一八七八年～一九二九年）が日本初の劇映画製作を京都西陣の千本通近辺で始めてからわずか一八年後のことであり、阪東のマキノからの独立についても牧野は大いに支援したものであるが、さて、この阪東妻三郎

プロダクションには、設立当初のものとして知られる一枚の記念写真がある。社名の書かれたステージの正面に阪東や、当時提携していたアメリカのユニヴァーサル社の人物と思われる西洋人が写っているその写真、その背景のステージはどんなのか。その後、その撮影所は、帝国キネマ太秦撮影所、新興キネマ太秦撮影所、東横映画撮影所などと名を変えていったけれども、九四年が経過したいま、このステージそのものは、もうとっくになくなってしまったのか、あるいは東映京都撮影所の敷地内にいまでも存在するのだろうか。

そんな疑問の答えを、残されたその時代その時代の写真を追うことで突き止め、その過程を『目で見る阪東妻三郎プロダクションの痕跡』として、共同研究会の場で発表したのは二〇一九年の三月であった。結論だけを言ってしまうと、現在、第四ステージと呼ばれている建物がそれではないか、つまり九四年前のスタジオは歴史を超えて現存している、というのがわたしの説である。可燃性フィルムのおかげで火災事故が頻発、また戦争もあって、多くが燃えてしまった日本の撮影所の歴史において、貴重な遺物である。もちろん現在も稼働するステージである。

学者ではなかったはづのわたしが、「近代東アジアの風俗



東映京都撮影所、第4ステージ（2018年、木村撮影）

史」に関わる日本をはじめ各国出身の研究者の方々の間に紛れ込み、いろんな方々の発表を聞くにつれ、一九世紀最末期にフランスやアメリカで生まれた映画が東アジアを含めた世界各地で受容・発展していった、その最初の歴史は、まさに同研究会がテーマとする時代にシンクロしているものだと改めて知ることとなった。

＊

この十一月、同研究会の有志が、上海へ二泊三日の弾丸ツアーに出かけた。もちろんわたしもこれに参加したわけだが、共同研究会で一緒に来た外来研究員の唐権さんが現地にいらっしやり、重要な資料のある書店や、上海租界の痕跡を案内してくださったのがありがたかった。

まずそもそも唐さんが選んでくださった宿がある福州路、これが戦前でいうところの四馬路（スマロ）であり、散策したその近辺の地域が虹口（ホンキュー）と呼ばれる地域であった。ディック・ミネ『夜霧のブルース』（一九四七年）にも、津村謙『上海帰りのリル』（一九五一年）にもこの地名はそれぞれ歌詞に登場しており、いずれも楽曲のヒットの後に同名の映画が製作された。野村孝『夜霧のブルース』（主演・石原裕次郎、一九六三年）、島耕二『上海帰りのリ



上海・四馬路の裏手。戦前のものと思われる建物が残っている。
(2019年、木村撮影)

ル』（主演・水島道太郎、一九五二年）。つまりは日本歌謡史にとっても、日本映画史にとっても、重要な場所を実際に歩いたのである。

魯迅が住んでいた場所として知られる大陸新邨にも、散策するうちに当然たどり着くわけだが、大陸新邨といえ、思いつくのは水久保澄子（一九一六年〜没年不詳）である。トーカー直前のサイレント末期の松竹蒲田の女優であり、小津安二郎『非常線の女』（一九三三年）や成瀬巳喜男『君と別れて』（同年）にも出演していることで知られる。マキノ雅弘や片岡千恵蔵といった映画界の他社の人間にもファンが多かった愛らしい少女役者であったものの、デビューした一九三二年からわずか四年、のちの山口百恵よりも短い期間で消息を消した幻の人物。

堀田善衛の上海日記、一九四五年一〇月二四日の記事には、水久保が大陸新邨に住んでいるという噂話が書かれているのだ。一九四一年には神戸でダンサーだったという話、上海の中華電影に関わった川喜多長政の東和商事にいた筈見恒夫が、やはり上海で水久保を見かけた話などとともに、水久保の最後の消息の一つとして知られたものである。

上海の中華電影といえ、戦時中の日本の国策会社であ



上海・大陸新邨。魯迅も住んでいたが水久保澄子もいたという。
(2019年、木村撮影)

62

り、跡地が残っている。上海戲劇学院が現在も使用しているらしいが、今回は寄らなかつた。松崎啓次、中川信夫、秘田余四郎、清水晶、野口久光といった、戦後の映画史に足跡を残した人々が若き日に関わった映画会社であり、東宝映画との合作による伏水修『支那の夜』（一九四〇年）等でも知られるが、作品の発掘や上映も含め、もっともっと知られるべき歴史である。現時点では甘粕正彦理事長で知られる満洲映画協会よりも、さらに埋もれているように思われる。



水久保澄子のプロマイド。
(推定 1930 年代半ば)

＊

共同研究「近代東アジアの風俗史」は、二年目から参加したが、この春には四年目に突入し、東アジアにおける「カフェー」についての国際研究を深める方向のようである。黒澤明の師匠である山本嘉次郎（一九〇二年～一九七四年）や東宝の副社長となった森岩雄（一八九九年～一九七九年）らが



ラウオール・ウォルシュ『彼奴は顔役だ！』
（原題 *The Roaring Twenties* 1939年）のオープニングタイトル。

いかにもたのしげに回想する、一九一〇年代の銀座の映画の文化、ブルバード映画や金春館の思い出、それらと切っても切れない、カフェーパウリスタ等の「カフェー」の文化を思うに、都市の文化、風俗史として、非常に刺激的であり興味あるところである。

なんといっても二〇二〇年、「狂騒の二〇年代」(*Roaring Twenties*)と呼ばれた一九二〇年から、一〇〇〇年という節目の年。アメリカにおいて騒がしかっただけでなく、ジャズやカフェーや映画の文化がヨーロッパやアメリカから、東京や京都や大阪や上海といった、東アジアの各地に押し寄せてくるこの時代について、もっと知りたいと思う。

（映画プロデューサー／エッセイスト／

国際日本文化研究センター二〇一九年度共同研究員）